この人に聞く

ある戦後史・鮎沢美代子氏聞き書き

――『村長さん』（小川書店　昭和33年刊）についてうかがいます。もうこの本の手持ちはありませんか。

鮎沢　ないんです。

――これはまだ図書館にも入ってませんで、何とかもう一冊古本屋で見つけたら図書館に入れたいと思っているんです。

鮎沢　どこの人だったかな、「もう一度出版してくれませんか」といわれたんです。ところが、この小川書店は潰れてしまったんです。

――これは鮎沢先生の人を語る点では、いちばんふさわしいですね。

鮎沢　そう。自分のことを自由に書いていますからね。この表紙の絵は家に吊してあったつるし柿で、ここの庭に自分で買ってきたんです。柿がとても好きでした。「甘柿ですよ」といわれて苗木を買ってきて植えたら、それが渋柿でした。それを一生懸命皮をむいて、吊したんです。この絵は娘が描きました。

――この本に前持っていた人の名前が書いてありますが、ご存知の方ですか。

鮎沢　知りませんね。この本が出たときはいろんな評が出たんですね。それをうちの主人が貼りつけてあるんです。（鮎沢さんの蔵書を見せて下さりながら）

――出たときには結構評判になったんですね。

鮎沢　そうですね。学術新聞とか何とかでね。

――信太郎先生の著作の中からもう一冊。今日、これを持ってきましたが。

鮎沢　ああ『大日本海』（京成社出版部　昭和17年刊）。持っていらっしゃいますか。それ心配したんですよ、うちの主人は。そんなのを向うの人達に知られると……。

――戦後のレッドパージのときのことですね。ただ、ここでもそういったことに触れる部分もありますが、

読んだ内容からすればあくまでも先生の研究の中の一環で、たまたま太平洋にこういう名称を使った地図があるものを紹介しているということですね。

鮎沢　そんなに心配するものでもなかったのでしょうけれど……。

——と思います。それで今日はいくつかお聞きしたい内容がありまして伺いました。一つは鮎沢さんご一家が福生に来られてお住いになるきっかけ。二つ目は奥様が福生で初代の婦人議員としてご活躍されましたが、その経過につきましては『ふっさっ子』にお書きになっていますが、まだ書き残していることがありましたら伺いたいこと。それと三つ目に文化連盟です。

鮎沢　文化連盟のことはあまり分らないのです。文化連盟のことは、こちらの山崎先生に。

始めての福生

——まず福生の町とのかかわりを中心として、少しお話しをうかがいたいと思っています。

鮎沢　昭和23年3月28日に引越して来たんです。どうしてここに引越したかというと、小宮（五日市町）で村長さんをしていたでしょう。そのとき、ここに谷合くに子さんが第二小学校の先生をして住んでいて、その人のお父さんが小宮で郵便局をしていたんです。私達はそこの二階を借りていました。だから夜などは電報が来ると私が受けとってね、電報の電信をうけたんですよ。それで借りているうちに、うちの娘がここの所を追い出されるから、ぜひ鮎沢さんここを買ってくれと言われたんです。「あなたも家が無いから、うちの娘も小学校の先生をやめて小宮に帰るから、それでここを買ったらどうです」と言われました。子供達は反対しました。「福生からでは学校へ通えない」というんです。もっと東京の近くにということだったんですけど、主人が見に来ましたときに富士山が見えたんですよ。それですっかり惚れ込んじゃいまして、「もうあんな良い所はない」というんですよ。それでここに引越したんです。その時も本などがあったりして、全部小宮へ疎開しておきましたからね。だから本を焼かないで済んだんです。

——小宮の前は確か八王子でしたね。

鮎沢　八王子に疎開していたんです。八王子の前に大森にいまして、大森からどうしてもどこかへ疎開しなければならなくなったんです。

――そういえば、『大日本海』にあるのは大森の住所でしたね。

山崎　それから、これは橋本義夫さんという「ふだんぎ」という会をやっていた人の葉書ですが、偶然一昨日の日曜日に片付けていたら奥さんのことが出ているんです。今の八王子横山町です。

鮎沢　そうですか。知ってたのでしょうか。

――この人は八王子で、福生でいえば山崎先生のような仕事をされていた方で、八王子の文化運動の中心となっていた方でした。

鮎沢　あっ、何か本屋さんをしていませんか。

――揺籃社です。

鮎沢　揺籃社、それなら知っています。まだお元気ですか。

山崎　もう亡くなりました。

鮎沢　もう亡くなりましたか。いろいろなつながりがありますね。それで、ここに引越してきたのが昭和23年3月でしょう。それで24年に何か婦人会の人がぞろぞろ家へ来たんです。私は留守だったんですが主人が一人でいたんです。「婦人会長になって下さい」と言いに来たんですよ。そしたらね、「ああ、いいですよ」といって、自分一人で、私の話を聞かないで引受けちゃったんですよ。（笑）それで帰ってきて、怒ったんです。私にはそんな事できやしない。そしたら、「まあ、そういうふうに頼まれたならやるべきだ」と、こう言うんですよ。それで婦人会長になったんです。

鮎沢信太郎

山崎　そのときは福生の婦人会と熊川の婦人会と分れていたのですか。

――これ（『ふっさっ子』二集）によりますと昭和24年4月の始め頃に各部落から二、三名ずつの婦人を呼んで婦人会を作る話し合いを開いて、とありますから、その婦人会の発足だったのでしょうね。

鮎沢　そのときに、当時助役で亡くなった斉藤さんが始めてくれたんです。

――ここの地区の会長ではなくて、全体の会長になってくれということですか。

鮎沢　そうです。福生町です。それから始まったんです。それで、また町会議員になれというので、その時田村さんから青梅にお嫁に行った小沢さん。小沢さんも婦人会長だったんです。それから平井の婦人会長だった宮林さん。婦人会にいた人がみんな議員になったんですよ。私は尻っぽで当選しましたが、何にもしない。ただ私のしたことは、赤線で生まれた子供をあそこへね。

山崎　柳山のところですね。

鮎沢　そこに混血児の施設を造るということで、それは大反対されました。横田基地の将校さん達が一生懸命だったんですよ。私も、それじゃあ協力しましょうという訳でした。ただ、男の人は誰も賛成しないわけ、ただ町長の森田幸造さんが一生懸命で、サンダースホームを見学に行きました。

――エリザベス・サンダースホームですか。大磯にありましたね。

鮎沢　中央線の阿佐ヶ谷に何か子供を集めていたところがありました。名前は忘れてしまいましたが、森田幸造さんとそんなところへも随分見学に行きました。それから、サンダースホームは横田基地の将校さんが車を出して下さって、その将校さん達と一緒に施設へ行ったんですけど、ちょうど亡くなられた沢田ミキ院長さんがいらっしゃらなくて他の人に横田基地の人達と一緒に話を聞いて、それで柳山に建てたんです。あそこの土地を借りるのも大変だったんです。

――サンダースホームのような福生の施設は、どの様な運営だったのですか。

鮎沢　それは、横田基地の人達がお金を出して、土地だけは町で借りたのでしょうか。

山崎　公民館の伊東静一さんが電話をくれて「施設の管理人の倉沢さんを知りませんか」というんですよ。確か家の近くの志茂に住んでいたんだけれど、全然消息がわからない。あの人はクリスチャンでね。同じクリスチャンに中松さんていう人がいて、中福生の木村輝幸さんの蚕室にいてガリ版なんてやっていたんですよ。それで、うちの「ふっさっ子」を何回かやってもらったことがある。それで、中松さんの事だけでも分からないかと思っていたが、それもわからない。福生新聞に昭和31年に施設の閉鎖のことは、ちょっと書いてあるんですね。

鮎沢　倉沢さんという方は、今の市役所の向うにあった教会にいたんですね。とても熱心な信者でね。それで、あの人に話したら、今度うちの方で作るホームの留守番になって下さるということで、奥さんも子供もみんな家中であそこに住んだんです。

――いまのどの辺の場所ですか。

鮎沢　ちょうど現在の市営プールのところです。

山崎　あそこは窪地でどうしようもないような土地だったところですね。あんなところだから貸したのでしょうけれど。普通は住宅など建たないところですね。

鮎沢　それで、私も羽村の方へ車で横田基地の人達と一緒に子供を預けないかと見付けて歩いたんです。そういうこともあったんです。

――ピーク時にはどの位の人数がいたんでしょうか。

鮎沢　あんまり入りませんでしたね。精々十何人だったと思いますよ。クリスマスなどのときには婦人会からも行ってくれて、そのときには私は町会議員だったので婦人会の会長はしていませんでした。横田基地の人達がいろんな事をやってくれたんです。だから横田基地とは婦人会のときはいろいろと関わりがあったんです。クリスマスには呼ばれ、映画を見せてもらったり飛行機の見学もしました。まあ、初めてだから向うも一生懸命だったのでしょう。何とか日本と仲良くしようというんでね。

——敗戦で終戦となり、アメリカに敗けたというなかで、こちらとしても米軍の方がどんな対応をするか心配の面もあったと思うんですが、全然そういう違和感みたいなものはなかったのですか。

婦人生活館のこと

鮎沢　なかったですね。そのあとでまた私達が生活館をこしらえましたね。

——牛浜の婦人生活館のことですか。

鮎沢　あれをこしらえるんで婦人会のときに車がなかったので、「ダットサン」というんですか、あれにみんな乗って奥多摩から檜原の方のお金持ちの家へ寄付を貰いにいったんです。その前に婦人会で、あの頃なかったので洗濯石鹸を売ったんです。それでいくらか利益を得ようというのですが、それ位ではとてもしょうがないので、お金を寄付してくれそうな家を歩くより仕方がなかったんです。

山崎　確か「ダットサン」といいましたよ。

鮎沢　それにみんな座ってね。

——それは米軍で出してくれたのですか。

鮎沢　いいえ、それはこちらで借りたんです。どこで借りたか忘れましたが、小曾木の方からいったんです。

山崎　あれに乗って小曾木あたりまで行ったのでは、身体が痛かったでしょう。

鮎沢　まだ若かったから。もうそれは忘れましたね。

——会館を建てるにあたっては、それはかなり有効だったのですか。お金はたくさん集まったのですか。

鮎沢　いいえ。それでね、都へ陳情して一二〇万円お借りしました。あそこには保育園があったんだそうです。

山崎　私は全然知りません。

鮎沢　知りませんか。それが何か壊れて空地になっているので「あそこに建てたらどうだ」ということだったんです。貸すと言われたんです。ところが、あそこは複雑なところで、お稲荷さんの土地だったんです。それで町会とお稲荷講とで二つに分れてしまい、何故あんなところを貸したという人もいるし、テンヤワンヤだったんです。でも、建つときにはスムースに建ったんです。だからこの前、立川の

社会教育会館の方々が来て話を聞きたいというので話しましたよ。そのときの建物の骨組みの写真も出したんです。

山崎　上棟式ですね。

鮎沢　そう。上棟式の写真もありまして、持っていってそれを複写しましたけど。いろいろやったんですが、また婦人会をしたのは町会議員を辞めてからです。そこを根城にして、その頃ようやく老人の事とか、老人の人にはあそこに碁盤でも置いてそこで遊んでもらおうとか、婦人会の人達にもそこでいろんな事をして頂こうというつもりでやったところが、何しろ資金がないものですから、結婚式場をしようということになったんです。結婚式場でいくらかお金をもうけようということで始まったんです。結婚式場を始めたのは昭和29年だと思いました。都からお金をまた借りたんです。ですから、毎年都から監査が来たんです。

――さきほど、一二〇万円出たといいましたね。

鮎沢　そのあと、又お借りして増築しました。その頃、式場がなかったから、随分はやりました。婦人会の人達には怒られちゃいました。

山崎　自分達が使えないということですね。

鮎沢　そのときに横田基地の人達が日本の結婚式を見せて下さいと見学にきたり、また基地内へ来て実演してくれといわれて、野口神主さんを連れて基地内でやって見せたんです。

――基地の中でですね。そんな事もあったんですか。

鮎沢　それから、旧家を見せてくれといって、田村和一さんのところへお願いしてね。あの頃まだ当主がお元気で、あの方はピアノなんか弾くんですよ。それから秋川（小川）の森田さんのうちも見学に行ったんです。

山崎　婦人会の結婚式場は、私が仲人という役を初めてさせてもらったところですよ。まだ三〇歳を少し過ぎた位で仲人第一号でした。

鮎沢　京都まで結婚式の衣裳を買いに行ったんです。それまでしたんです。そうしないと、その頃ですからみんな衣裳を持って来ないんです。初めは振袖くらいで、段々に打掛などでやりました。その頃、島田さんという方が髪と着付をやってくれたんですが、この方も住込みでよくやってくれました。

――婦人生活会館を中心にしてやろうとしたのは、婦人生活の改良運動みたいなことですか。他にはどんな事を。

鮎沢　まず、結婚式を簡素にしようということ。それに料理教室もしようという訳で、今は亡くなりましたが昭島に住んでいた八王子の第四高女の先生をしていた浦野先生が、料理教室をしたいというんです、場所がないので、あそこでやったんです。狭かったんですが、何人か来て料理教室を始めたんです。みなさんに少しでもと思って始めたんで

すが、結婚式の方が盛んになっちゃいましてね。でも牛浜町会の方には「空いていれば、どうぞ使ってください」といってました。たいてい夜使ってもらったんです。そのうち、だんだん方々に結婚式場ができちゃいました。

山崎　幸楽園も始めましたしね。

鮎沢　都から二回お借りしたのが九七万円の借金が出来てしまいました。安くしているから、仲々もうけは少ないし、だから私達は本当のボランティアでしたから。行ったときにお弁当を食べさせてもらうこと、それに結婚式をした人達が「どうぞ」なんていって、サービスでしょうね、私達にくださるお金、それくらいでした。それで九七万円の借金が残ってしまったわけです。それで石川常太郎市長のところに行って、借金をつけてこれを買い取ってもらいたいと言ったんです。そしたら、牛浜に会館がないからというので、それで引受けてくれたんです。その前に会館の前のお稲荷さんが邪魔になるから生活館で動かしてくれというので、またお金をかけたんです。前は真ん中にあったんです。それで、町会へあげたんですけど、その後お稲荷講ともめたらしいですね。それで「どうにかならないか」といってきたんですが、私達にはどうにもならないという事で、市役所で全部引受けたのでしょうかねえ。

——この婦人生活館の館長さんとか、その運営というのはどうだったのですか。鮎沢さんなんかが中心でボランティアでやっていたのでしょうか。

鮎沢　理事が私と野島カヤ（福生）さんと古里の大沢史図さん。今川アヤヨ（五日市）さんが館長でした。最初は瑞穂の小野ヨシさんでした。小野さんは結婚式の途中で倒れたんですね。あのときは慌てましたね。それで今川さんが館長になったんです。

——そうすると議員をやめて婦人生活館の仕事をするようになってからは、毎日出ずっぱりだったんですか。

鮎沢　その後、婦人会の会計をしていまして、そう毎日はなかったんですけど、ほとんど生活館へいっていた訳です。日のよい日は午前一回、午後三回なんて事もあったんです。なるべく午前一回、午後二回位にしようという程、はやったんです。何しろ我々は本当のボランティアで、お昼をいただくだけの事でした。誰かが、「お茶でも飲んで下さい」なんていうお金はあったんですが。

——福生だけでなく西多摩全域の人から利用されましたか。

鮎沢　西多摩全域からいらしたんです。

山崎　そうでしょうね。あの当時は青梅線沿線には何もなかったですものね。

鮎沢　本当、全域です。市役所の人で、そこで結婚式を挙げた人もいますよ。随分遠くからも来ました。

——全国的にもこういう活動はあったと聞いています。

――そうですね。私の母は九州の大分ですが生活改善委員をやっていました。公民館じゃないけれど、昔小学校と青年学校がくっついていて、そのうち青年学校がなくなって、そこが講堂みたいな感じだったんです。私が小さいとき、そこで結婚式をしていたんです。女の子と男の子の役がありますね。私は女の子の役で、それをやった記憶があります。

山崎　アイサカズキですね。

鮎沢　それを我々がやったんです。館長が行進曲を回して、それで「入場」というので入場してきて、それから三三九度は家から正月のお屠蘇の道具を持っていって、それを使っていたんです。

――鮎沢さんの家から持って行った物を使っていたのですか。

鮎沢　そうです。みんなそんなものでした。

鮎沢　だから常任理事の四人は生活館に行っていたんです。四人いないと巫女代りができなかった。

鮎沢　当時大勢パンパンがいたでしょう。市役所にいた影山さん達が家へ来て、何とかその人達の教育をしようという事でした。本町の会館が一小の入口にありましたね。

山崎　青年クラブです。今はコヤマさんの宿舎になっています。

鮎沢　あそこに女の人達を集めて、話し合いをしたことがあります。私も呼び出されて、何の話をしたかも忘れてしまいましたが、とにかく随分集まりました。余計な話になりましたが、そんなこともありました。

山崎　まだ福生は熊川の方が古かったですからね。私がＰＴＡのことを聞きかじりするようになってからも、ＰＴＡの役員を引き受けるのに家主さんに相談に行ったというのがあるんです。夫婦でいったかどうかは知らないが、家主さんに相談してから返事するという、そういう伝説がある。

鮎沢　もう、本当に古い町でしたね。

――そういう町にもかかわらず鮎沢さんのように、いきなり引越して来られた方に……。

鮎沢　そうなんです。会長になってくれなんて。どうして私のところに来たのかしら。

――その辺がお聞きしたいですね。

鮎沢　それがわからない。来てくれた方は、みんな亡くなっちゃいました。

――ただ、鮎沢さんがここに来られる前に小宮で村長をしていたことは、当然みんな知っていたと思うのです。

鮎沢　そうですね。それで小宮で婦人会を作ろうということで、一度集まったことはあったんです。それを誰から聞いたのかしら、とも思ったんです。本当、何で私のようなものをと思いましたよ。

山崎　当時、大学教授の家庭が珍しかったからでしょうか。それに、元先生だということでしょう。

文化連盟のころ

――婦人会の話はここまでにして、次に鮎沢信太郎先生が町との関わりを持っていかれますが、それはやがて山崎先生と一緒に文化連盟の発足になります。その辺の経過みたいなもの、また鮎沢先生自身と当時の町との関わりはどうだったのでしょうか。

鮎沢　文化連盟は山崎先生が家へいらして下さって関わったのでしょう？

山崎　文化連盟の副会長は米屋の児島信一さんと教育委員長をやった来住野元一先生の二人にお願いしたんです。確か児島さんあたりが鮎沢先生がいると言ったんじゃないか。私もそこの事情はわからないです。

鮎沢　私もそれは全然わからない。誰が頼みに来たのか。

山崎　今の婦人会館を使って、絵の会で福生美術会というのを作って、小貫政之助先生に入っていただいて、会長に医者の石川孝明先生を担いだんです。小貫先生の一番のファンが石川先生だというわけで、橋本兵五郎さんと私とで頼みに行ったんです。石川先生は医院を開いていたので私は当然知っていた訳ですね。それですから、石川先生が橋本先生に話したかどうか。

鮎沢　橋本先生とは非常に親しかったから、橋本先生でしょうね。

山崎　橋本先生かも知れませんね。確か、文化連盟をつくったときは、私と内田満ちゃん（内田満蔵氏）と三人で話しが始まったんです。橋本先生はすでに福生町の教育長でしたから、内田さんと私とで役場へ相談に行き、橋本先生と三人で話して、そのときはまだ文化連盟なんて考えないで、ただ単に町民展覧会というのをやろうと。それで、町民展覧会をやるのに町でいくらか「補助してくれ」と橋本先生のところへ行ったんです。寄付はどうなるかわからないが、展覧会だけはやろうと。そのときは、まだこちらの先生の話しはなかったと思います。第一回の美術展を福生第一小学校の展覧会に合わせて、講堂といっていましたが体育館を借りてやり、その後、こういう事をやっていくんじゃ文化連盟というようなものが必要だというんで、そのときに先生の話しが出たんではないか。だから多分、橋本先生あたりでしょう。

鮎沢　小宮の村長をしていたときに、五日市で橋本先生は校長をしていましたから。

――五日市のどこの学校ですか。

山崎　五日市小学校です。

鮎沢　五日市に高校をつくるときに、橋本先生達と親しか

ったんです。小学校に家政女学校をつくり、村長になったので高校をつくろうということになり……。

山崎　自分でも講師をされて。

鮎沢　自分で講師をして、日大の先生や何か大勢つれてきたんです。鎌田先生とか、教授をつれてきて、一生懸命でした。

――そうすると橋本先生とは、小宮にいたときから親しかったんですか。

鮎沢　そうですね。父が吉野の校長をしていて、橋本先生の奥さんが先生をしていて、私の妹が教えてもらったものですから。

山崎　とにかく、橋本先生は当時この全域の教育界の大ボスだったから。

鮎沢　大ボスですよ。今、校長先生をしている人で、あそこに伺わない人はないですよね。私達も青梅に行ったときはお寄りしたりしています。

山崎　そうすると橋本先生辺りからいわれて、私がこちらに伺ったのでしょう。

鮎沢　だから、私は山崎先生がすすめて下さったのだろうということしか覚えていないんです。

山崎　もう一つお聞きしたいのですが、奥さんは23年に越して来て早々から町との関わりを持っていましたね。恐らくそれをよしとしたのはご主人なわけですからやれたんだと思うんですが、ご主人自身は町との関わりというものをその間、文化連盟との間でいろいろ表面的な仕事をやってくださる前というものは、全然なかったんですか。

鮎沢　ないですね。学校の事ばかりで、ここから通勤していましたから、ほとんどなかったですね。

山崎　うちでやる社会人学級で講師をお願いしたのは、どちらが先だったかな。

――これ（『ふっさっ子』第二集）、によると、社会人学級の方が先ですね。

鮎沢　ああ、時々講師に頼まれて行きましたね。

――この間、広報に鮎沢先生の事を紹介いたしました。あれは『村長さん』のことに触れています。昭和22年8月13日に福生の小学校で開催された西多摩文化会で「新郷土史論」というのを講演したことになっている。もちろんこれですと福生に引越される前のことですね。

鮎沢　そのとき、主人は青年団に関係してたんです。青年団から村長に出されたのです。だから、それでじゃないんですか。

――今日は、この辺のところを詳しく教えていただきたいと思っていたのですが。当時、多摩自由大学という組織がありまして、橋本孝蔵さんを福生のリーダーにして、随分と文化運動をやっておられたんです。

鮎沢　あの人も青年団の方で、主人を知っていたんです。

主人は小宮の青年団の団長をしていたんです。小宮に引越すと、すぐでもないですが、何とか青年団を作れということになり、青年で兵隊から帰ってきた血気の人達が多かったからこの村を何とかしようというんで、そういう人達が青年団を作るようになり、主人も「やれっー、やれっー」ということだったらしい。それで、24年ですか、25年ですか、選挙が公選になったとき引張り出されたんです。

――選挙の方は、もっと前の昭和22年3月です。第一回の公選制の選挙で出たんですね。

鮎沢　それは青年団に引張られたんです。どうしても青年団をつくってくれといって、青年団の人が町を改革しようという運動をやった訳です。何しろ、小宮の町も封建的でどうにもならない。福生辺りでもそうだったですね。

山崎　ええ、そうですよ。市役所の向う側の教会でコーラスを始めた人がいて、ところが会場を出てくれといわれてうちの教室を使ったことがあったんですが、そういうときも、メンバーが怪しいというんですね。福生の人はほとんどコーラスにはいなかったですね。それで、その人達がうちにピアノを持込みたいというんです。私は自分の仕事に差しつかえちゃいますから、慌てて断わったんです。教会も貸してくれといわれたんです。日曜日だけ使うというので、「じゃあ、いいでしょう」といったら、うちの前に立てるというので大きな看板を持ってきたんです。日曜日の午前中だけというので、「貸しますよ」といっちゃったんです。そしたら看板を立てようとするんです。それは困るといったんです。そんなことがあってから、コーラスで使わせてくれというので、「どうかな」と思っていたら、ピアノを持ってくるなんていうことでした。

鮎沢　あれはきっと松尾さんという音楽の先生がいたんです。

山崎　中学校の先生ですか。その後の青年の演劇活動も「あれはアカい」なんていわれましてね。

鮎沢　何でもアカかったですね。(笑)

山崎　町の元老株はすぐに「アカいアカい」なんていいましてね。とにかく、鮎沢先生にお願いして受けていただいて、私等が町へいくらかお金を貰いに行きたいので「先生、一緒に行ってくれ」といったら、先生が「そんなものではない。これは文化連盟で、仲間で作った連盟だから自分達で会費を責任を持って運営していくべきだ」とね。

――それは卓見だと思います。

山崎　それはもちろん正論ですよ。先生は小宮でいろいろと経験されて、で福生はもっと開けている町だと思ったでしょうから。ところが当時の人達は文化連盟ができたら町が一切面倒をみてくれると、文化連盟に入れば自分達がお金を出さずにやってくれると、そういう考え方しかなかったですね。それで初め、ちょっと軋轢があったんです。で

も先生はすぐに折れてくれまして「みんながそういうなら、いくらかでも貰いに頭を下げる」といって、先生が役場へ一緒に行ってくれました。だから初めは補助金といっても年に一万円位だったと思うんです。昭和35年だから町政20周年のとき、一挙に一〇万円出してくれた。瀬古さんが町長のときです。そのときは少し大がかりなポスターを作ったりしました。

鮎沢　山崎先生が一生懸命やったから出来たようなものです。だって主人は大学に行っているでしょう、ですから山崎先生がいなければこれは出来やしないですよ。

山崎　とんでもありません。

――そうすると山崎先生、この鮎沢先生が加わったというのは非常に大きい意味があったと思うのですが。文化連盟の発足から軌道にのるまでの歩みの中で、鮎沢先生が果した役割というものは、何か記憶されていますか。

山崎　これは何といっても戦後、戦争中の疎開者がまだこの地域にいて、さきの自由大学にしても何にしても、五日市もそういう人達がいて文化的風土があったんですよ。青梅はもちろん吉川英治さん、絵かきの小島善太郎さん、そういう人がいたから。ところが福生は何もなかったですからね。そこへ鮎沢先生の名前が出たから、福生にとっては存在価値が大きかったんです。それで、今申し上げた副会長は児島さんと来住野先生。来住野先生は俳句の会を作っていた。水谷清一さんの方が古い副会長だったかな。初めは水谷さんと来住野先生だったかな。それは『ふっさっ子』に出ているから確かめてもらえばよい。ただいずれにしても会長さんの名前がそこにあって、一応、福生の文化連盟の型ができた。ところが実態は文化連盟といっても、私がいうとおかしいのですが、単に山崎が動いてるだけで文化祭をやるなんていっても町が何の援助をしてくれる訳ではない。連盟の組織といっても会長が先生で、副会長が児島さんなり水谷さんにしても、とにかく動いてくれるような人ではなかった。皆、町会議員をやったような人ですから。

鮎沢　それで山崎先生が動いた様な訳です。連盟ができてあれだけ盛んになったのは山崎先生の功が大ですよ。

山崎　いや、とんでもない。ただ私は実態がどうであるか知らなかったけれど、福生町が市になれば、市が前面に出てくれるなと思ったから、それまで何とかつないでおけば、そうすれば形が出来るなと思った。だから敢えて、機をつくって文化連盟と財源をつくっておくなどと、そんな事は考えずに、ただ何とか「延ばし〳〵」しておくことだと思っていたんです。

――そうすると、もう一つ戻りますが、山崎先生自身が「道芝会」をはじめ戦後の青年達とかかわった時期

がありましたが、その中では、鮎沢先生との関わりはどうですか。先程、社会人学級の話はありましたが。

山崎　そうですね。文化連盟以外はなかったですね。だって今と違って、親しくは近づけませんでしたよ。だから会合のときだって、先生はいばって座っている訳でもなく、そんな事は心配はなかったんですが、ただ、口をきくにも緊張していましたね。（笑）

鮎沢　あら、それは申し訳ありません。主人は田舎育ちですから、そんな事はなかったんですけどね。

山崎　ただ、私共田舎者にとっては大学の先生というのは、今でいえば内閣総理大臣みたいなものですから。先生は気楽に「山崎さん、やり良いようにやっていていいよ」なんていうだけで、決して難しいことを言った事はなかったんです。

鮎沢　だから、山崎先生の事をほめてばかりいましたよ。

山崎　予算の陳情にすぐ行ってくれたのも恐らく村長さんの経験があるから、何か動かすには多少頭を下げなければということがあったんでしょうね。そういう経験のない大学の先生だったならば、福生の町役場へ頭を下げに行くのは嫌だなんてことにも……。

鮎沢　そうですね。五日市高校をつくるときに都から小宮へ電話がかかってきて、すぐに来てくれというんです。都から「どこへ高校を建てるんだ」というんです。それも書いてありますね。

——これは本当に笑い話のようですね。上手に書いてありますね。

鮎沢　「じゃあ、これから大急ぎで自転車でいってくる」と、その頃、何も乗り物はないのですから。それで都の役人が来て、「ところで、どこへできるんですか」といったら、いい加減節に「この辺につくります」といったと、帰ってきて話して笑っているんです。そしたら、それが本当になっちゃったよなんて。だからいくらか政治が好きだったんでしょう。そうでなかったら、いくら勧められても村長なんかになる訳ないですよ。

山崎　青年の政治に対する熱気は確かにありました。

鮎沢　そんなに公立学校に熱心なのに、自分の子供は他所の私立中学に入れていたんです。貼り紙もされました。

——「新制中学に期待する」なんていうのを書いたりしていたら、「どうなったんだ」と言われたという事が書いてありますよ。

鮎沢　貼り紙をした人は、中学校の先生になっています。

忠霊塔の建設

——私は『村長さん』を何度か読みましたが、鮎沢先生の学問的な仕事は別に置いて、私などが先生の考え

方を知る唯一の手がかりは「新郷土史研究は民衆の手に」という一章と、「福生の忠霊塔の再建」の部分なんです。これは先生の歴史に対する考え方みたいなもので、民主主義というか、あるいは住民自治といいますか、当時日本が地方自治制度に基づいて新しく出発するということを先生なりに期待を持っておられた訳だし、そういった方向に対し先生の一つの考え方を述べている訳ですね。それで忠霊塔では町を二分して賛成反対があったようですね。そのことをお聞きしたいのですが。

ここに「忠霊塔建設を批判する」ということと、もう一つは「忠霊塔をつくりましょう」という、たまたま二つの刷り物があります。建設を推進する側の忠霊塔建設委員会と反対する側の福生町民有志というのとあるのですね。これを読みますと、先生は恐らく反対する方の後盾になっていたと思われるんです。

鮎沢　そう、平林寅吉さんというお爺さんがすごく反対したんです。もう亡くなりましたが。

――この方は福生の方ですか。

鮎沢　その方も大森からこちらに、疎開し、引越してきた人です。たくさん土地を持っているし、よく家に来たんです。二人戦死させているんです。お爺さんが来ては忠霊塔の話をするんですね。

そうですね、戦争が始まったときに「もうこれは敗ける戦争だな」と、家では始終いってました。だから、「もうそんな事はいわないで」と、私は「家だけではいいけれど他所へ行ってはいわないで」と、一生懸命いっていたんです。そのくせ、自分に徴兵がきたんです。八王子にいるときでしたが、それですっかり頭を刈り、みんなに来てもらいお祝いをしたんです。出発しようとしていろいろ仕度をしていたら、その翌日、解除の通知が来たんです。

――そうすると、実際には行かなくて済んだんですね。

鮎沢　済んだんです。そうでなければ、金沢か丸亀か遠くに行く筈でした。

――召集令状が来たのは、昭和何年ですか。

鮎沢　もう終戦の少し前、確か19年でしたね。頭も刈ってもう出るばっかりにしたんです。

何しろ、反対のこれをけしかけたのはきっと主人でしょうね。今でこそいえますけど。

――これは、当時の町の政治の問題にもなることだったでしょうから、恐らく大変だったと思うんです。これを読みますと先生の歴史に対する考え方が非常によく出ていると思うんです。今回、少し先生の仕事を書くのに福生のことですとこれしかないので、差障りないように先生の歴史感を紹介できたらと思っているんです。山崎先生は、この忠霊塔の問題はご存知ですか。

山崎　俺は全然こういうのには関わりがなかった。どうして関わりがなかったんだろう。役職が何もなかったからでしょうね。古い町というのは、みんな役職で動くから。町会長とか青年団の役員だとか、そういうのでしょうね。文化連盟は、こういうときまだ全然相手にされない。単に友好団体というしかない。忠霊塔が建てられたのは知っていたけれど、そういう賛成反対があったのは、私は全然知らなかった。

——町を二分する大変な問題だったようですね。

鮎沢　そのお爺さんが始終家に来て、話していました。

山崎　今この文章を見ていると、両者とも随分、立派な文を書いていますね。

鮎沢　うちの主人なんかが書いたのかも知れないですよ。

山崎　賛成派だって仲々立派なものですよ。

——この本の最後に忠霊塔のことは、こう書いてあるんです。「町民有志一同の名において忠霊塔建設問題を批判するビラが配布された。それは穏建中性ともいうべき仲々の名文であった。僕が今までに紹介した諸々の反対論の要をあげ、一いち条理をつくしたものであった」こういうふうに書いてあります。だから、自分で書いたというふうにはしないが、これの後盾となって、こういった内容を持ったものを入れるならばという様に、あるいは関わりがあったと思いますね。この忠霊塔のことでは、何か記憶がありますか。

鮎沢　ないですね。ただ、このおじさんが来て二人で一生懸命話していても、ずっと聞いている訳にはいきませんでしたので。が、主人の考えだとすると、これには反対だなということはわかりました。

——福生新聞が最初「反対だ」というふうに威勢よく持ち上げるが後でクルッと変わっちゃうんです。それも批判しているんです。

鮎沢　批判していますか。

——学問的な仕事以外にこういった町の動き方についても、反面かなり関心を持って見ておられたということだと思うんです。

山崎　まあ、そういうことですね。

学問の周辺

——もう一つお聞かせいただきたいのですが、先生の町との関わりは積極的に持たれなかったということですが、逆に戦後のその時期の著作としては、随分、一生懸命学問的な仕事をされた時期だと……。こういったものから『山村才助』（吉川弘文館　昭和34年刊）など伝記類をまとめられたのもそうだし、学問的な仕事のいちばん油の戦って戦後の仕事をされた時期では

ないかと思うのです。その辺で先生の学者としての仕事は、奥様はどんなに見ておられたのですか。

鮎沢　何しろ、ここから横浜市大へ通って、夜また日大の講師をしていたんで、夜、家に帰ってくるのが遅いんです。

山崎　そうでしょうね。あの当時は電車が大変だった。東京から二時間はたっぷりかかった。

鮎沢　だから私はつくづく思うのは、食べ物で癌になったんじゃあないかと思いますよ。外食ばかりで野菜の繊維物をとらないし。牛乳はよく飲んでいましたが、牛乳だけじゃねえ。今考えると申し訳ないみたいですが。それで、電車の中で本を読むのが勉強だといってましたね。

山崎　恐らく夜ですと電車の間隔は四〇分位あったと思いますよ。

鮎沢　「立川で随分待たされて、寒かった」とよく言っていました。

——立川から南武線に乗り替えて行くのですか。

鮎沢　そうではなくて、こちらから行くときは八高線と横浜線でした。「何でもかんでも、これから勉強したい」と年がら年じゅう言ってましたよ。

——自由な時間で、好きに勉強したいということですか。

鮎沢　ええ。本を買うことばかりで、家の事はさっぱりでしたよ。

——その辺のこと、できましたらお話しいただきたいのですが。

鮎沢　昔はいくらも貰っていないでしょう。それなのに子供が三人とも私立大学でしょう。一番下の女の子は中学、高校、日本女子大へここから通ったんです。長女は都立の桜町高校へ通いましてね、小宮へ疎開したものですから、それから第四（現都立南多摩高校）へ転校して、小宮から通ったんです。それから日本女子大へ入ったんです。男の子は、私も勉強しろなんていいませんでした。それで、みんな私立です。私立は月給の割には高いですからね。よく娘に「お母さんは、もう少し私にお小遣いをくれればいいのに、いつも皆さんにご馳走になってばかりいる」といわれました。日本女子大なんていうのは、地方から出てきて、裕福な家庭のお嬢さんが多いでしょう。でも、今自分で子供を育ててみればね。私は元気なものですから、今は「お母さんは私達にとって子孝行ね」なんていっています。

何しろ本の虫ですものね。本の古書目録が来ますね。そうすると夢中になって見て、すぐ電話ですもの。電話をここに持ってきたのもその為で、柱がないからといって八千円取られたんです。その頃の八千円というのは痛かったんです。電話して、「売れちゃった」なんていうと、ガッカリでした。あの頃、天理教の大学が早かったんです。

——天理大ですね。コレクションが有名ですね。

鮎沢　地図の凄いのがあるんだそうです。だから、本当に

貧乏させられちゃって。(笑)

——月給の大半がそちらに行っちゃった、という訳ですね。

鮎沢　そうです。大森にいたときは、途中で風呂敷を二つかかえて来るんです。まあその頃、本は安かったんです。それでもその頃は日大で、月給はそんなに貰ってないんです。日大三高のときもそうでしたね。日大三高のときの先生方が勉強家揃いだったんです。だから後にみんな大学教授になったんです。

——これだけの目録(『鮎沢信太郎文庫目録』横浜市立大学図書館　平成2年刊)になる位の本をご自分で集め、買ったということであれば、大変な仕事をされたという様に思われますし、普通の学者の仕事じゃないですね。これを拝見して私が一番感じたのは、普通の先生ですと、まず学問だから文献から入るんですが、その文献というものは活字化されたものである程度、今まで集められたものでやってやれないことはないんです。先生の場合は、こういった地理学ということもあって、かつて出たもの、古地図類を原資料として収集しなければいけないという気持ちが恐らくあったんでしょうね。今の時期に収集しないと散逸してしまうからと。

鮎沢　それを心配していました。

——横浜市立大学の図書館でも先生が買うにあたっては随分協力したようですが、これを見ると八割位は、先生が自分でお買いになったようですね。

鮎沢　横浜市立大の図書館長をしていたときに、予算を貰って買ったのがある訳ですね。

——それが※印が付いているものですね。それ以外は月給なりポケットマネーで全部買ったということですね。

鮎沢　そうなんです。だから家なんか建てられやぁしません。(笑)でも、この間も教え子にいわれたんです。「奥さん、こんなにしてくれる大学はありませんよ」なんて。

——これを見れば鮎沢先生の仕事は分かりますよ。それで、一つお聞きしたいのです。マテオリッチの地図のことですが、前に伺いましたときに朝鮮の方が来て、それを先生に見せたんだけれども買えなかったということ。そのことをもう一度教えていただけますか。戦前で、昭和16年位とか。

鮎沢　大森にいたときですから、戦前ですね。あるとき朝鮮の人(早稲田大学生、黄炳仁)が地図を持ってきて、主人がそれを見て、ビックリしているんです。

——それは大森のご自宅に持って来られたんですか。

鮎沢　そうです。家へ持って来たんです。それで「いやあ、これは凄いものだ」といったんですが、値段は確か二万円

といってました。「あのとき、買っておけばなあ」とよく言ってました。その頃の二万円といえば……。

——これには写真が収録されているんですけど、後で横浜市大には納まらなかったのでしょうか。

鮎沢　ないんでしょうね。朝鮮の人が「どこに行ったんだか分らない」といってました。確かそういうふうに書いてありませんか。（現在ソウルの崇田大学付設博物館所蔵）

——見つけたという様な書き方をされていました。でも戦前で二万円は、普通の家庭で出るお金ではないですね。

鮎沢　熊本大学の非常勤講師で行っていたときに見つけた「伊能忠敬」の地図は、熊本で「到底他所のところへは出せません」といって、本屋さんが売らないと言ったんです。それを、欲しくて欲しくて、家へ帰ってきて、「何とかあれ、手に入らないか」といったのが、八万円だったんです。そしたら、たまたま八万円、何でお金が入ったんだか、学校で出るようになって、とうとう買ったんです。それには直筆で「熊川」が出ていました。

——地名として入っていたんですか。

鮎沢　入っていました「熊川」が。それを死ぬ一週間前に「あの地図を出せ」といわれてね。どうするのかと思ったら、同じ大学にいた知り合いの人にあげるようにというんです。

——その地図をですか。

鮎沢　「どうぞ、これを持っていって下さい」といって、あげました。

——先生のお墓はどちらにあるんですか。

鮎沢　南多摩霊園です。その頃、西多摩霊園もまだないし、信州に行くのも大変だろうからと。日大で教えた、桐朋の先生を呼べというんです。亡くなる10日位前だったでしょうか。夜八時頃来てくれまして、私が「何を頼まれた」と聞いたら「お墓のことだよ」なんていいました。いつの事だったか、その先生が父親の墓を南多摩霊園につくったことを話したのを覚えていたらしいですね。

——先生の恩師の名前で、石田幹之助先生の名前が出てきますが、日大の恩師だったんですか。

鮎沢　そうです。あの先生も女の子さん三人あって、やはり学者というのはみんな貧乏で、お嫁さんを出すときにお金がなくてね。「貸してくれ」というので貸したんです。そんな事もありました。

毎年1月6日に日大の学生の一六会という卒業生の会があるんです。その一六会に去年から石田先生のお嬢さんも入っていらして、いちばん年齢は下の方で、いま日大の付属中の先生をしているんです。今年は一七人集まりました。終戦後の人達で、主人が死んでから18年も命日というと来て、お墓参りに行くんです。その前にも学生時代にはよく

ここに泊ったんです。そうすると狭い家ですから子供を近所の家へ「お宅は広いから子供だけ寝かせてね」と頼みました。でも、主人の教え子も随分亡くなりました。進士慶幹さんも亡くなるしね。

——進士慶幹さん、あの人もそうなんですか。歴史関係の著作を多く出しておられますね。

鮎沢　進士さんが生きているうちは、みんな通知を出して、それで18年間続きました。

——進士さんは先生の教え子だったんですか。

鮎沢　あの人がいつも先頭に立ってね。胃の手術をして、「どうも食べられない」なんていって、それから少し経ってから再発しちゃったんです。だから、あの人がいるうちは、主人がなくなってから18年間家で集まりをしたんですよ。その後私学会館で毎年集まるんです。今年は一七人でした。石田先生のお嬢さんも史学科出ですから、昨年から来るようになったんです。

——恩師としては、石田先生あたりが一番親しくされていたんですか。

鮎沢　そうですね。石田先生が「利瑪竇(りまとう)(注)」の研究をしなさいといってくれたんです。「利瑪竇」なんていったって、みんな知りはしないですね。日大三高で教えた子が、赤坂のどこか中学の先生になって、「僕は利瑪竇の話をみんなに聞かせたんだよ」といってました。その子は毎年墓参に来てくれるんです。だから、人の世話をするのが好きで、それで「家はほっぽり放し」。

——それは奥さんにまかせておられたのでしょう。

鮎沢　この奥さんがいい加減だったからでしょう。今度、一番下の娘が学校の先生になりました。こういう家が出来ますよ、というのを絵にかいて、建築の事務所をやっていたんですよ。石油ショックから事務所をやめて、今は共栄短大で今度教授になりました。それが、ようやく主人の後の……。

——学者の道を進まれている。

鮎沢　本を出したりして、「クロワッサン」によく夫婦で出るんです。

——川島幸江さんというんですか。

鮎沢　そこに川島四郎というのが書いてあるでしょう。

——何年か前に亡くなられた方で、電車の中で豆と何かを食べているという。

鮎沢　ホーレン草や豆を食べるという……。あの方の次男の所に嫁いでいるんです。

——あの川島先生ですか。あれは抱腹絶倒で、面白くていつも読んでいたんです。(『食べものさんありがとう』正続・朝日新聞社刊)。食物学の先生ですね。もと陸軍少将でした。

鮎沢　『村長さん』にも川島四郎さんが推選文を寄せてく

れました。

——電車の中でコブやお豆をヒョイと口に入れたり、毎日青菜を皿一杯食べたり……。

——教壇の机の中に入れておいて講義の合い間に食べるとありました。

鮎沢　それで、主人などは本当に安月給取りで、戦後は少し良かったんですが、戦後良くなったといっても……。

——戦後といっても日本経済が豊かになったときは、亡くなられてしまったんですね。今定年になる人達はやっとある程度年金はもらえるし、今がいちばんいいんじゃないでしょうか。

鮎沢　私もおかげ様でいろんな仕事をやりすぎて、もうやめたいと思い、みなさんに言っているんですが、仲々やめさせてくれない。というより後を継いでくれる人がいないものですね。

——今何のお仕事をしていらっしゃるんですか。

鮎沢　「母子福祉」です。それも後がどなたかいないかと思って、副会長さんなどに頼んでみても「とても出来ない」といわれちゃうんです。市役所へ行って、誰かいないですかといっても、「死ぬまでやってろよ」なんていわれちゃって。（笑）そういわれるとグウの音も出ない。それで保護司をしていましたので、更生保護婦人会といって、この会の西多摩郡の副会長をしています。福生にも、この会をこしらえたんです。それから、竹早を出ていますから、西多摩郡の竹早会に関係しています。

——学芸大付属の竹早高校ですね。

鮎沢　あそこに師範学校があったんですよ。年が上ですから、やはり会長をさせられているんです。役員会というと家でやるんです。更生保護婦人会も西多摩郡全部、家に集まるんですよ。この家がいちばんいいと言うんです。（笑）どうしてかというと、五日市線でも青梅線でも駅から近いからというんです。高齢者事業団もやっているんです。でもこれは理事ですから、言ったり、聞いたりするだけでよい。それに退公連といって、退職公務員連盟の常任理事をしているんです。配ったりする仕事があるので、もうやめさせて下さいと頼んでいるんです。もう、きりがないですね。

——今日はどうもありがとうございました。

この聞き書きは故鮎沢信太郎博士の業績の一端を知るために御令室であった美代子氏と対談した記録（平成三年二月五日）であるが、福生の戦後史としても貴重な内容のため、美代子氏の御了承を得てその一部を本誌に掲載させていただいた。聞き取りには山崎茂男先生、菅井郁子が同席した。

（菅井憲一）

鮎沢美代子氏略歴

明治37年2月25日西多摩郡小宮村養沢に生まれる。父沖倉与一、東京府女子師範学校第一部卒業、大正13年小宮尋常高等小学校に勤務、以後八王子尋常高等小学校、大森第一小学校、大森第四小学校を歴任、昭和17年退職する。
昭和5年3月　鮎沢信太郎と結婚。
現在、福生市民生委員推選委員、杉の子保育園理事。

（資　料　1）

忠霊塔建設趣意書

西南役以降大東亜戦争に至る戦争又は事変に於て、祖国の万歳を叫び日本民族の繁栄と無窮を祈って、海に山に散華し犠牲となられたこれ等の方々の悲壮な最後と惨澹たる情景を想い及ぶとき誰か哀悼の涙を垂れぬ者がありましょうか。

『生きる悩みの多い今日死んだ者の面倒がみられるか』といふ様な心なき言葉を耳にすることなきにしもあらずではありますが、祖国を思う一念から国難に殉じた方々を棄てゝ顧りみないようでは何人も真の幸福は得られず真の平和を此の国土に期待することはできないでありませう。

米国にはアーリントンに英国にはトラファルガー広場に戦争犠牲者を祀る碑があり何れも全国民により毎年鄭重な祭典が行はれておるということは人道上当然のことであると存じます。私共も福生町の戦争犠牲者のためにその必要を考へ、今回町内各種団体のご協力により福生町営グランド南側公園敷地に平和日本の礎となられた方々のため忠霊塔を建設し永くその御霊を祀ると共に後代再び斯様な犠牲者を出さないよう世界悠久の平和を祈念することに致し度いと存じます。

就いてはこれが建設に要する費用を町の皆さんにお縋りし建設の実現を図りたいと存じますのでいろ〳〵とご批判もございませうが、何卒私共の微意をお汲みとり下さいまして全町民各意の絶大なる御賛助を賜りますやう偏にお願いいたします。

昭和二十八年六月　日
福生町忠霊塔建設委員会（いろは順）（氏名略）

（資　料　2）

忠霊塔建設を批判する

福生町の皆さん！

福生町忠霊塔建設につきましてはこゝ数ケ月多くの反対の声をきゝながらも着工を進めようとしていると聞いています。私共は良識ある町民の皆さんにこうした半強制、非民主的募金行為が民主日本の社会に大手を振ってよいのか、こゝに批判を加えたいと思います。但し私共に致しましても戦争で失くなられた方々に対しましては心から哀悼の意を表わしているものであります。

◉　かつて戦におもむかれた人々は遺した家族の生活を案じて戦死されていったに違いありません。それなのに一体国や町はこうした遺族の方々にどのような援護の手をさしのべたでしょう？　敗戦国とはいえ、こうした対策なしに果して石碑を建てることで霊が慰められるとでもゆうのでしょうか？

◉　ではその募金方法は、と云いますと、発起者が（その発起人自身個人では賛意を表わして居らぬのに役柄上入っている人

もあるときゝます。）町民税に比例して全町民に、町会長→隣組長とゆう組織を通じて半強制的に寄附をとって歩いてではありませんか。現にことわった家にその近所のお偉方が再度足をふみこんだ事実さえあります。殊に遺家族の家まで二人失くなられていようが三人失くなられていようがおかまいなしに割当てたり又隣に行っては「戦死者のある家ですらこんなに寄附したのだから、そうでないお宅なぞは……」といってださねば非国民扱いされるにいたっては迷惑次第です。

⊙　又敗戦以来ネオンサインにてらされ米人の腕にすがる婦女子のいき交う牛浜駅附近の地にこの霊を慰める塔を建てるとは戦死者の霊が晒首にされるも同様でしょう。

⊙　私共は何気なく忠霊と云う言葉を使っていますがこうしたことこそ知らぬ間に、主君の命には善悪を問わず生命を捧げるといった道徳を強いられ一部の軍閥や財閥の私利私欲のために起した戦争に国民全部がつながれたかつての歴史を再び繰返すのではないでしょうか。

日本国憲法により人の上に人はなく人の下に人なき民主々義の原則によって生きようと約束させられているこの社会にいまだ忠という言葉が残っているのは不思議なことです。

皆さん！　最初この忠霊塔建設の計画が建設委員会から各町会長、隣組長を召集して、いゝわたされた時誰一人として賛意を表わす者がなかったときゝます。お金をすでにだされた方も心の中では割切れぬものがあったに違いありません。学校は増築されなければならないし、公民館建築もしてほしいし、道路工事、下水工事等々町民が平和な豊かな生活をしていくにはあまり多くのことが残されている時、町民税から二〇万円、募金から百五拾万円と云う計画で石碑に使い（ママ）るとは何と云っても無謀です。忠霊塔を眺めることによって遺族の方々は寒さをしのぐことも出来なければ、平和日本をきづくことも出来ないでしょう。どうか建設委員の皆さんはこれに集ったお金をその遺族対策に廻すべく御努力下さい。そして常に一人の町民の声をもきいて真に民主的な政治がこの町に行われる様町会議員の方にお願いする次第です。

福生町々民有志一同

（立川愛雄氏提供）

（注）　イタリア人宣教師マテオリッチのこと。明末に中国に渡り三十年間布教活動を行ったが、西洋の学問を東洋に紹介した功績は大きい。ユークリット幾何学を紹介し、一六〇二年に北京で作った世界地図は日本へも渡り、大きな影響を与えた。